

主が語られた

アモス書3章

ししがほえる、だれが恐れなくていられよう。主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう。(8)

アモスは職業的な預言者ではなく、もともとは一介の羊飼いに過ぎませんでした。それゆえイスラエルの民に向かつて神の審きを語ったとき、「何の権威をもつてあなたはそのようなことを語るのか？」というような非難の声が上がったのでしよう。

そこでアモスは、彼がなにゆえに主の言葉を語るのかを明らかにします。彼はまず幾つかの例をあげて原因と結果の関係を語ります。二人が一緒に歩くのは彼らが約束したからであり、林の中で獅子が吠えるのは獲物を得たからである。これらを聞いていた聴衆は原因と結果の当然のつながりに何の疑問もなく承認したことでしょう。そこでアモスは彼が最も語りたかったことを告げます。「主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう」と。アモスが預言の言葉を語るのには、主なる神が彼に語られたからであるということです。神の力ある言葉を聞かされたアモスは、黙っていることなど出来なくなつたのです。アモスはそれほどまで真剣に神の言葉に聞き、その力ある言葉に全く捉えられてしまつていたのです。それゆえ、アモスはたとえ禁じられても、預言しないではいられなくなつたのです。

わたしたちが他の人々に福音の言葉を語るのには、力ある主の言葉に捕らえられるからです。主の恵み豊かな言葉がわたしたちを動かすほどに心の奥深くに届きますように。